

〔原著〕 松本歯学 12 : 322~328, 1986

Key words : 歯周病患者 - 主訴 - 初期治療 - 統計

歯周病患者の統計的観察
第1報 昭和53~54年における初診時の主訴と
その処置についての検討

金山奎二, 宇都宮 淳, 樽井邦博, 伊藤茂樹
塩谷清一, 小沢嘉彦, 太田紀雄

松本歯科大学 歯周治療学講座 (主任 太田紀雄 教授)

Statistical Studies on the Patients with Periodontal Diseases
Part 1. The statistical observations of chief complaint in the
first visit and initial preparation in 1978 and 1979

KEIJI KANAYAMA, ATSUSHI UTSUNOMIYA, KUNIHIRO TARUI,
SHIGEKI ITOH, SEIICHI SHIOGAI, YOSHIHIKO OZAWA and NORIO OTA

Department of Periodontology, Matsumoto Dental College

(Chief : Prof. N. Ota)

Summary

We investigated the periodontal disease of 267 patients (174 males and 93 females) who visited the periodontics department in the Matsumoto Dental College Hospital, from January 1978 to December 1979. The records of the periodontal patients showed the chief complaint, plaque control score, location of the complaint, Gingival Index (GI), Plaque Index (PI), Calculus Index (CI), mobility, pocket depth, width of attached gingiva, degree of bone loss, the progress of the disease, the initial preparation and other clinical findings from the first visit.

1. In February there were many 30-40 year-old patients of both sexes, and in most cases the chief complaint was mobility.
2. The location of the chief complaint was generally the anterior teeth of both arches, and there were many cases in which the Gingival Index was 3, the Plaque Index was 1, the Calculus Index was 2, and mobility was 2.
3. The plaque control score at the first visit was 66-70% and the state of oral hygiene was bad.
4. Case in which the pocket depth was 4.0mm and the width of the attached gingiva was 3.6-4.0mm were numerous.
5. Almost all of the patients visited the clinic with diseases in the moderate stage.
6. Besides scaling and brushing instruction, temporary splint by wire and resin ligature were the most frequently used periodontal treatment.

結 言

歯科 2 大疾患は歯周病と齲蝕である。歯周病は発現率が高く、成人の90%以上が罹患していると言われている。しかし歯周病の症状を主訴として来院するのは少なく、自分で気がつく場合には、かなり進行した状態である。ほとんどが齲蝕の主訴で来院し歯科医によって歯周病と指摘され、はじめて認識する場合が多い。最近、マスコミによる口腔衛生思想の普及によって患者の歯周病に対する認識も高まっているが、依然として実質欠損を伴わない疾患ということで治療せず放置する患者が多くみられる。

歯周病患者の主訴とその歯周の状態を把握することは歯周治療上大変重要である。我々は歯周病患者がどのような状態で来院するかを把握するための統計的観察を行なっている。今回その第一報として、初診時における主訴とその処置について検討を行なったので報告する。

資料及び研究方法

1. 資料

昭和53年1月より昭和54年12月までの間に松本歯科大学病院歯周病科に来院した患者のうちほぼ資料の整っている男性174名、女性93名の計267名を対象とした。

2. 研究方法

当科では初診時の診査の手順として、歯周チャート用紙(記録用紙)に診査内容を記入し又質問表に記入している。今回は記録された歯周チャート用紙において来院の月、年齢、主訴、初診時ブランクコントロールスコア(P.C.R.)は、O'Leary¹⁾、主訴部位とその部位における臨床所見としてのGIはLöe²⁾、PIはSilnessとLöe³⁾、CIはGreenとVermillion⁴⁾、動揺度、ポケットの深さ、付着歯肉の幅、骨吸収はSchei⁵⁾らの骨吸収メジャー測定法、診断及び処置について比較検討した。

結 果

1. 来院歯周病患者の月別分布について

来院患者は2月が最も多く35名(13.1%)(図1)で男性が25名(9.4%)、女性が10名(3.7%)であり、次いで3月が多く34名(12.7%)で男性が20

名(7.5%)、女性が14名(5.2%)を占めている。来院の月と年齢についてみると2月は40歳代が最も多く31.4%、次いで30歳代の28.6%、3月は30歳代が最も多く34.4%、次いで20歳代の21.9%となる。

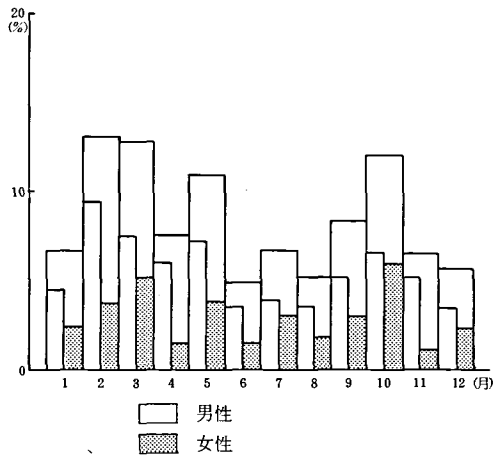


Fig. 1. Distribution of first visit month

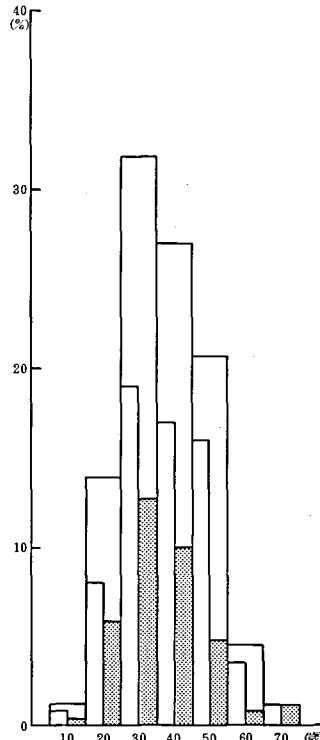


Fig. 2. Distribution of age

2. 年齢別分布について

来院患者のうち30歳代が最も多く80名(31.7%) (図2)で男性が48名(19.0%), 女性が32名(12.7%)となり、次いで40歳代が多く68名(27.0%)で男性が43名(17.1%), 女性が25名(9.9%)を占めた。

3. 主訴別分布について

来院の動機となった主訴については動揺が最も多く78名(29.2%) (図3)で男性は52名(19.5%), 女性では26名(9.7%)を占め、次いで多かったのは違和感の67名(25.1%)で男性が49名(18.4%)で女性が18名(6.7%)となった。主訴と年齢についてみると動揺を主訴とするうち最も多かったのは40歳代の40.5%で、次いで30歳代と60歳代の24.3%であり、違和感を主訴とした中では30歳代の28.6%が最も多く、次いで50歳代の25.4%ということになる。

4. 初診時のブラークコントロールスコア

初診時における患者のブラークコントロールスコアではP.C.R.66~70%が最も多く13名(10.4%) (図4)で男性が10名(8.0%)で、女性が3名(2.4%)となり、次いでP.C.R.51~55%が多く12名(9.6%)で男性が7名(5.6%), 女性が5名(4.0%)を占める。ブラークコントロールスコアと年齢についてはP.C.R.66~70%のうち30歳代が最も多く38.4%を占め、次いで40歳代、50歳代の23.0%と続き、P.C.R.51~55%のうちでは40歳代と50歳代が最も多く33.4%、次いで30歳

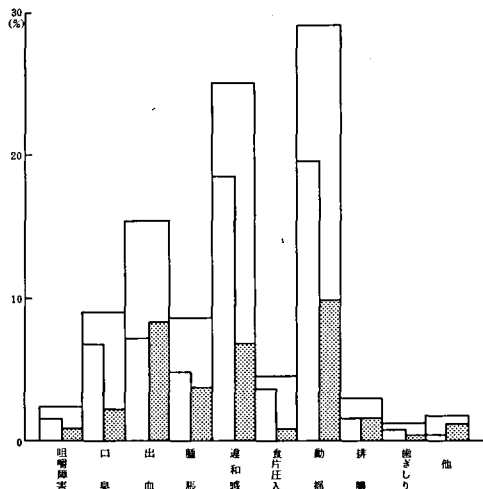


Fig. 3. Distribution of chief complaint

代の16.7%となった。

5. 主訴部位の分布について

主訴とする部位で最も多かったのは、下顎前歯部で78名(37.0%)で男性が48名(22.8%)で女性が30名(14.2%)であり、次いで多かったのは全歯で44名(21.0%)となり男性が34名(16.2%)で女性が10名(4.8%)を占めた。主訴部位と年齢については下顎前歯部では40歳代が34.6%と最も多く、次いで30歳代の30.7%、全歯については30歳代が50%を占め、次いで40歳代の27.3%となる。

6. 歯肉炎指数, (G.I.) の分布について

主訴部位の歯肉炎指数(G.I.)についてはG.I.3が最も多く95名(37.0%) (図5)で、男性が66名(25.7%), 女性が29名(11.3%)を占め、次いでG.I.0が多く57名(22.2%)で、男性37名(14.4%), 女性20名(7.8%)であった。G.I.と年齢についてはG.I.3では40歳代が最も多く31.0%、次いで30歳代の29.8%となり、G.I.0については30歳代が最も多く29.1%、次いで50歳代の27.3%となる。

7. プラーク指数 (P.I.) の分布について

主訴部位のブラーク指数(P.I.)では、P.I.1が最も多く91名(35.1%) (図6)で男性63名(24.3%), 女性28名(10.8%)で、次いで多いのはP.I.2の73名(28.1%)で、男性46名(17.8%), 女性27名(10.3%)となる。P.I.と年齢については

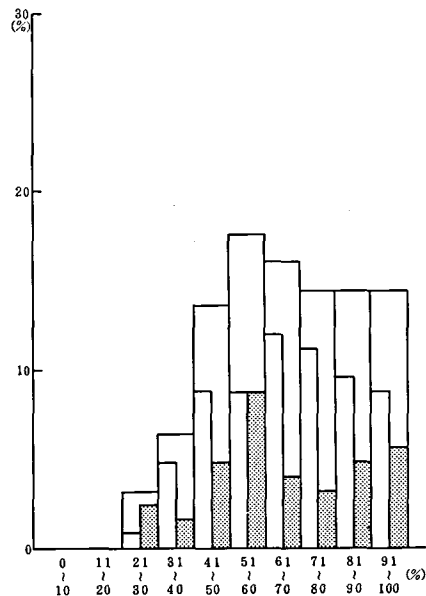


Fig. 4. Distribution of P. C. R.

P.I.1では30歳代が最も多く32.6%,次いで40歳代の28.0%,P.I.2では40歳代が32.8%,次いで30歳代の28.5%の順となる。

8. 歯石指数 (C.I.) の分布について

主訴部位の歯石指数 (C.I.) ではC.I.2が最も多く82名 (32.0%) (図7)で,男性57名 (22.3%),女性25名 (9.7%)で,次いで多いのはC.I.1の80名 (31.3%)で,男性47名 (18.3%),女性33名 (13.0%)であった。C.I.と年齢についてはC.I.2では30歳代が最も多く38.1%,次いで50歳代の22.3%となり,C.I.1では30歳代が最も多く36.0%,次いで40歳代が28.0%を占める。

9. 動揺度の分布について

主訴部位の動揺度では動揺度2が最も多く97名 (37.7%) (図8)で,男性68名 (26.5%),女性29名 (11.2%)となり,次いで動揺度1が多く72名 (28.0%)で男性46名 (17.9%),女性26名 (10.1%)となる。動揺度と年齢については動揺度2では40歳代が最も多く31.1%,次いで30歳代,

50歳代の23.3%となり,動揺度1については30歳代が最も多く40.6%,次いで40歳代の25.0%となる。

10. ポケットの深さの分布について

主訴部位のポケットの深さでは4.0mmが最も多く74名 (29.2%) (図9)を占め,男性43名 (17.0%),女性31名 (12.2%)となり,次いで多かったのは3.0mmで47名 (18.6%),そのうち男性は31名 (12.2%),女性は16名 (6.4%)となった。ポケットの深さと年齢については4.0mmのうちでは30歳代が最も多く34.2%,次いで40歳代の28.6%となり,ポケットの深さ3.0mmでは50歳代が最も多く31.1%,次いで20歳代が26.7%を占めた。

11. 付着歯肉の幅の分布について

主訴部位の付着歯肉の幅は3.6~4.0mmが最も多く36名 (20.0%) (図10)で,男性25名 (13.9%),女性11名 (6.1%)となり,次いで多かったのは2.6~3.0mmで35名 (19.4%),そのうち男性21名

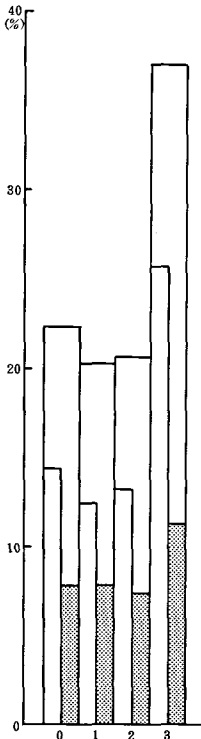


Fig. 5. Distribution of gingival index

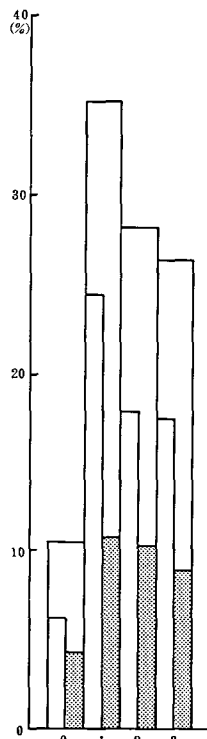


Fig. 6. Distribution of plaque index

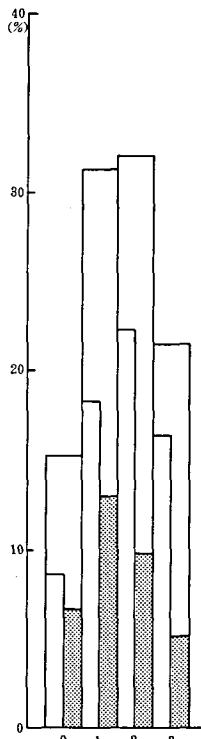


Fig. 7. Distribution of calculus index

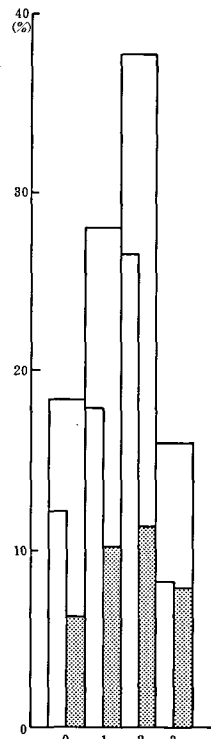


Fig. 8. Distribution of tooth mobility

(11.6%), 女性14名(7.5%)を占めた。附着歯肉の幅と年齢について、附着歯肉の幅3.6~4.0 mmでは20歳代が最も多く30.8%, 次いで30歳代の23.1%となり、2.6~3.0 mmでは30歳代、40歳代が共に34.5%と最も多く、次いで20歳代の

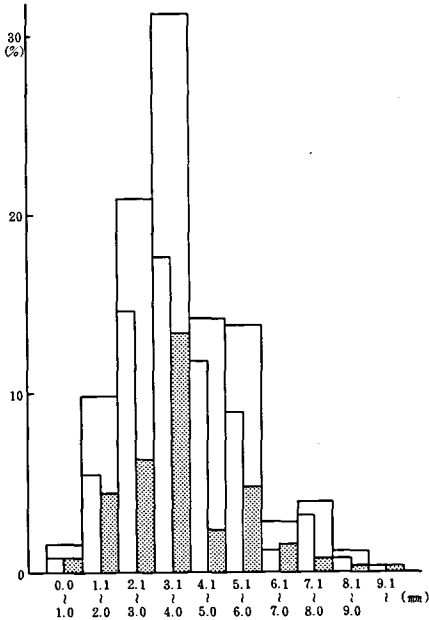


Fig. 9. Distribution of pocket depth

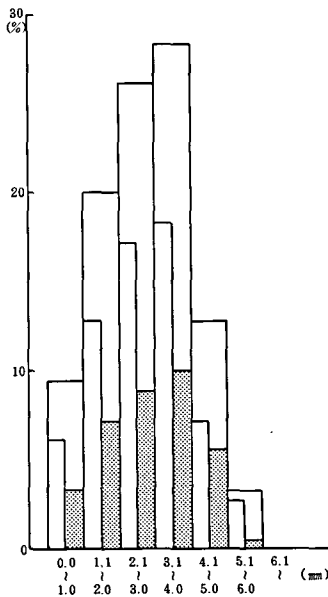


Fig. 10. Distribution of attached gingiva

24.2%となる。

12. 骨吸収度の分布

主訴部位の骨吸収度は46~50%が最も多く26名(14.1%) (図11)で、男性19名(10.3%), 女性7名(3.8%)となり、次いで多かったのは36~40%の19名(10.3%)で、男性13名(7.0%), 女性6名(3.3%)を占めた。骨吸収度と年齢について骨吸収度46~50%では30歳代が40.9%と最も多く、次いで40歳代、50歳代の27.2%となる。骨吸収度36~40%では40歳代が最も多く35.3%, 次いで50歳代の29.4%と続く。

13. 臨床分類による進行度の分布

結果より臨床分類された進行度については中等度が最も多く98名(26.7%) (図12)で男性64名(24.0%), 女性34名(12.7%)となり、次いで多かったのは軽度で92名(24.4%)で男性59名(22.1%), 女性33名(12.3%)を占めた。進行度と年齢については中等度では40歳代が最も多く34.7%, 次いで30歳代の30.6%, 軽度では30歳代が最も多く32.6%, 次いで50歳代が26.1%を占めた。

14. 処置内容による分布

当科では来院患者のほとんどが初期治療としての歯石除去及び刷掃指導を受けており、それを除いての処置について最も多かったのは暫間固定で91名(34.0%) (図13), 男性61名(22.8%), 女性30名(11.2%)となり、次いで多かったのは咬合調整の73名(27.3%)で、男性45名(1.8%), 女性28名(10.5%)を占めた。処置内容と年齢については暫間固定では40歳代が最も多く36.3%,

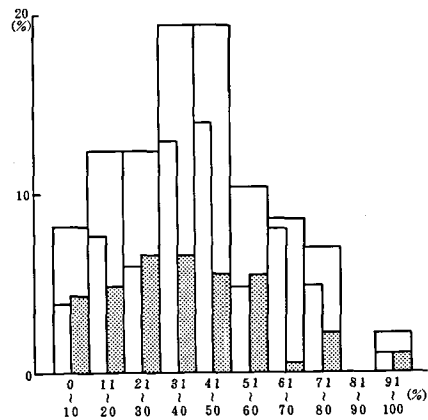


Fig. 11. Distribution of bone loss

次いで30歳代の28.4%，咬合調整では30歳代が33.4%，次いで40歳代の23.6%という結果となった。

以上の結果において男女間における X²検定の結果、有意差は認められなかった。

考 察

歯周病の来院患者の構成は、30歳代、40歳代、50歳代の順に多く、又男女別にみると思女共に30歳代が最も多くそこをピークに40歳代、50歳代になるにつれて徐々に少なくなり60歳代では男女合わせて11名であった。逆に20歳代では35名と60歳代70歳代を上回っていた。これは、佐々木ら⁶⁾、新谷ら⁷⁾の31~40歳代より急激に増加し、最も高い割合を占めるのは41~50歳代であるという報告に対し我々の結果では、ピークが30歳代であったという点で異なっていた。来院の月別でも、2

月、3月の順に患者数が多く、そのうち30歳代の占める割合は2月が28.6%，3月が34.4%と高い割合を占めていることがわかる。主訴項目に関しては動揺、違和感、出血の順に多く、特に動揺、違和感を訴えた患者が全体の約半数以上を占めている。

上野ら⁸⁾の報告によると来院患者の約80%が食片圧入を主訴としているのに対し、我々の結果では動揺が最も多く(29.2%)食片圧入を主訴として来院した患者は極く4.5%に過ぎず、これは動揺による食片圧入を訴えずに単に動揺を主訴として来院した例、逆に動揺を訴えずに食片圧入を主訴とした例が考えられるが、いずれにせよ患者自身の自覚に個人差が有り又、表現の仕方にも違いがあるがその点は患者の訴えを重視した結果である。

初診時のブラークコントロールスコアに関して P.C.R.66~70%が最も多く口腔内清掃状態は不良であり、逆に P.C.R.20%以下は1人もいない状態である。中には P.C.R.95~100%というほとんど磨けていない患者が11人もいたことは注目すべきところである。主訴部位においては下顎前歯、全歯の順に多く、部位と主訴との関係を見ると動揺を主訴とする部位は上下顎の前歯部に集中してい

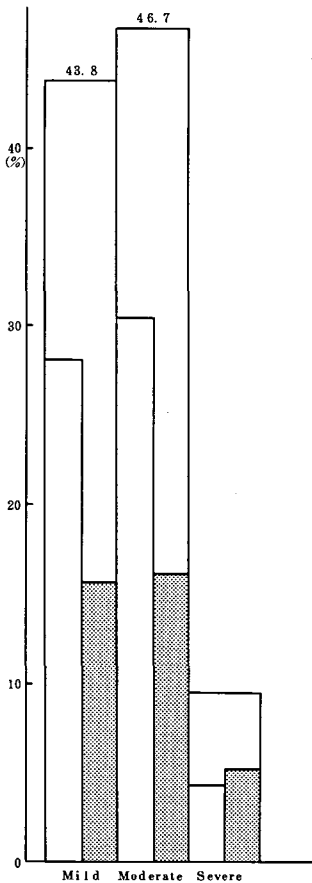


Fig. 12. Distribution of diagnosis

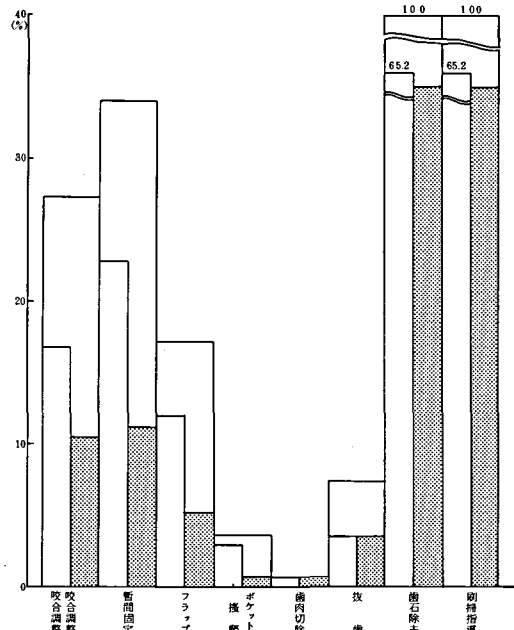


Fig. 13. Distribution of treatment

るのに対し、違和感を主訴とする部位は全歯、下顎前歯部に集中している。次に、G.I.についてはG.I.3, P.I.についてはP.I.1, C.I.についてはC.I.2, 動揺度は2度が最も多く、ポケットの深さは4.0 mm, 附着歯肉の幅は3.6~4.0 mm, 骨吸収度が46~50%という臨床所見の結果が多く歯周疾患の進行度でみると中等度に集中していると考えられる。臨床分類による進行度についてはやはり男女共に中等度が多く40歳代に多いという結果となり、次いで軽度の者は男性では50歳代、女性では40歳代が多かった。高度の者は20名(7.5%)と少なく男性では40歳代、女性では30歳代が多かった。軽度、中等度、高度になるにつれて男性の占める割合が増加しているという上野ら⁸⁾の報告に対し、我々の結果では重度においては女性の占める割合が男性を上回っていた。処置内容においては初期治療としての歯石除去、刷掃指導を除いては暫間固定、咬合調整の順に多く主訴項目で動揺が高い割合を占めていることと関連付けられる。

結 論

昭和53年1月から昭和54年12月までに松本歯科大学病院歯周病科に来院した267名(男性174名, 女性93名)を対象に主訴, 初診時ブラークコントロールスコア, 主訴部位, 臨床所見としての歯肉炎指数(G.I.)、プラーク指数(P.I.)、歯石指数(C.I.)、動揺度、ポケットの深さ、附着歯肉の幅、骨吸収度、臨床分類による進行度及びその処置内容について統計的に検討し次の結果を得た。

1. 来院患者は2月に多く年齢は男女共に30歳代が多く主訴は動揺が多かった。

2. 主訴部位は上下顎前歯部に多い傾向があり、歯肉炎指数(G.I.) 3, ブラーク指数(P.I.) 1, 歯石指数(C.I.) 2, 動揺度2という状態が多かった。

3. 初診時ブラークコントロールスコアでは66~70%が多く口腔清掃状態は不良であった。

4. ポケットの深さは4.0 mm, 附着歯肉の幅は3.6~4.0 mmが多かった。

5. 臨床分類による進行度では中等度が多く、中等度になって始めて来院する患者が多かったことになる。

6. 処置内容については初期治療としての歯石除去、刷掃指導を除いては暫間固定が多かった。

文 献

- 1) O'Leary, T.J., Drake, R.B. and Naylor, J.E. (1972) The plaque control record. *J.Periodontol.* 43: 38.
- 2) Löe, H. (1967) The Gingival Index, the Plaque Index and the Retention Index Systems, *J.Periodontol.* 38: 610-616.
- 3) Silness, P. and Löe, H. (1964) Periodontal disease in pregnancy, II. Correlation between oral hygiene and periodontal condition. *Acta Odont. Scand.* 22: 121-135.
- 4) Green, J.C. and Vermillion, J.R. (1960) The Oral hygiene index; A method for classifying oral hygiene status, *J.American Dent. Ass.* 61: 172-179.
- 5) Schei, O., Waerhaug, J., Lovdal, A. and Arno, A. (1959) Alveolar bone loss as related to oral hygiene and age, *J.Periodontol.* 30: 7-16.
- 6) 佐々木隆博, 鈴木英雄, 松村健三郎 (1972) 歯周疾患の統計的観察1, 主訴からみた患者の実態について. *日歯周誌*, 14: 26-32.
- 7) 新谷文子, 中島美紀子, 塩野宗則, 大場浩二, 新谷高, 中村治郎, (1982) 歯周疾患患者の間診表の統計的観察. *日歯周誌*, 24: 165-174.
- 8) 上野益卓, 岡部秋彦, 玉井憲二, 佐藤昌司, 三上格, 河野昭彦, 深井浩一, 高橋克弥, 大滝晃一, 長谷川明 (1985) 歯周疾患患者の初診時診査項目に関する検討. *日歯周誌*, 27: 618-634.